

【特別講演3】 第17席 「古医書の成立－素問・靈枢を中心として－」

東京 戸川 芳郎

中国における古医書研究は、さきに本会に招請された郭靄春、馬繼興ら諸氏の業績にみるとおり、現今まことに著しい。

中医学の専攻養成の一環として、緊要な古医書の学習のための、医古文のテキストと参考書が、院校ごとに編刊され、そしてその古文読解の水準向上と各種手引きの普及にあわせて、基本文献の徹底理解が求められ、周到な校注をほどこした中医古典や用例とインデックスを附した医療用語辞典が陸續と出版されてある。

いま、それらの状況を紹介しつつ、伝統的な文献学“目録学”の観点から、今いちど漢唐学術史のうえでの、古医書の成立過程を追って、その特徴を「黄帝内経」においてとらえたい。

この機会に、運氣論の一、二のことや臓腑の三焦についても言及してみたい。